（2）アクセントになる色彩

基調色を背景として、そこにちりばめられたさまざまなアクセントになる色彩があってこそ、色彩景観は豊かで鮮やかになる。色彩景観には、くすんだ色調や明るい色調で統一することで優れたものとなる場合もあるが、沖縄の場合には、すでに鮮やかな色彩の要素が景観の中に散在している。これらの鮮やかな色をアクセント色として活かす。

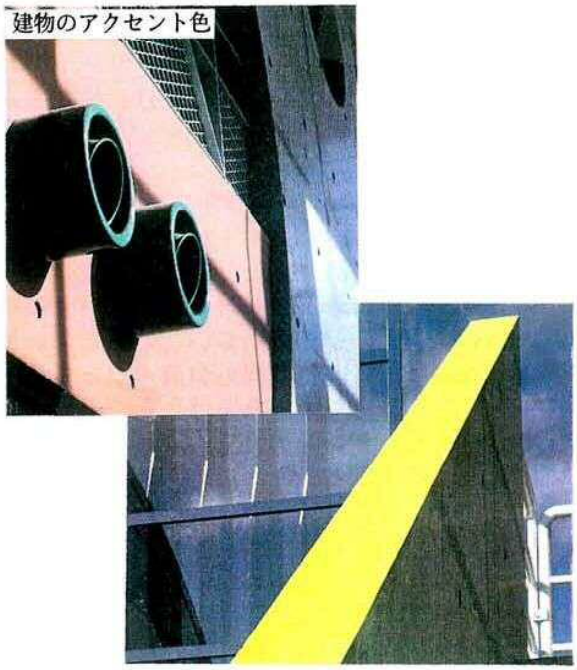
①花を活かす

花は、景観の中に現れる美しいアクセント色の代表である。花の色は、単に物理的な色彩ではなく、生命の息吹を感じさせる特別な色彩である。同じ色を人工的につくっても花のように美しくはない。また、花の色はひとつひとつで微妙に違い、風を受けて揺れ動く様が一層色彩のあざやかさを強調する。基調色を背景に、そこでひときわ際立つ色彩を持った花を選び、植栽に採り入れる。

コンクリートの日除けにかかる花

②建物などのアクセント色

土木施設は、建物を含め概ね上記の基調色を用いることがふさわしいと考えられる。しかし、そうした建物の一部に鮮やかな色彩を少し採り入れると、基調色が一層引き立ち、景観が活気づけられる。窓枠や軒裏、梁下や部材の小端などに、少しだけ鮮やかな色を使ってみると、小粋な景観づくりに役立つ。


建物のアクセント色

③看板やサインの色

看板やサイン、案内板や表示板などは目立つことが必要なために、自ずと基調色と強い対比をなす鮮やかな色彩が使われる。

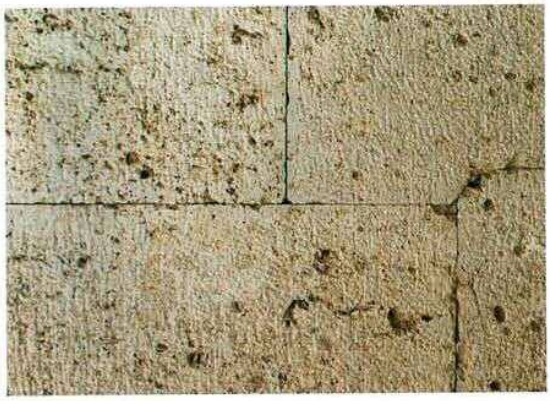
しかし、景観の中のアクセント色は大きすぎるとかえって景観をくどい、どぎついものにしがちである。

大きな看板やサイン、案内板や表示板では、地色は穏やかな基調色でまとめ、文字や図柄に鮮やかな色を使うことを基本とする。その際も余り多くの色が混在しないよう気をつける。

自然石を活かしたサイン

基調色を活かしたサイン

# １０．自然の持つ素材感



琉球石灰岩のテクスチャ
さまざまな仕上げとエイジング

ニービヌフニ

有孔虫石灰岩（粟石）

＜沖縄らしさの特性＞

●眼の感触としての素材感

景観は、ものの配置、大きさ、かたち、色など、物理的な形式でほぼ決定される。しかし、最後の決め手になるのは「素材感」である。

素材感は、ものの現実感、確かに存在している感覚である。「素材感」が景観の具体的な現れ方を決めている。

眼で見ただけでも、その素材の「感じ」というものが伝わる。ものの表面に現れている凹凸や陰影、色彩の微妙な変化などが、景観に味わいを与えている。

●肌触りとしての素材感

素材感の中でも、最も具体的に感じられるのが「肌触り」である。すべすべしたもの、ザラザラしたもの、冷たいもの、暖かみのあるものなど、ものにはそれぞれ固有の肌触りがある。

肌触りは、一番身体に近いものの感じ方である。近いところで感じる景観では、視覚だけでなく、肌触りが非常に重要になる。

●ものの歴史とエイジング

「もの」にはそれぞれの成り立ちや背景、いわば「もの」の歴史がある。ものはつくられたとき、生まれたときから、時を経るにつれて変化して行く。

樹木や草花は生長し、花を咲かせ、年老いて、やがて枯れることで年月の経過を感じさせる。花や実は季節の巡りに合わせて何度も再来し、季節感を強く感じさせる。

「もの」は光に照らされ、風雨に打たれて姿を変えて行く。新しいときには美しく、次第に古びてみすぼらしくなるものもあり、風格を増して行くものもある。

このように、時間の経過とともに、ものの姿が変化して行くことを「エイジング」という。素材の選択では、エイジングを考慮することが大切である。

●琉球石灰岩

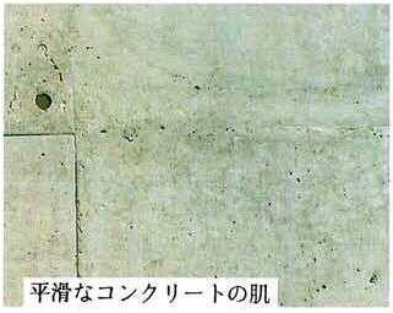
沖縄の代表的な素材である琉球石灰岩は、一般にきめが荒く、ザラザラした感触を持っている。さらに、仕上げによって、一層荒々しい肌合いにもなる。積み方によっても素材感は変わる。

琉球石灰岩の素材感の命は、表面の粒子がつくる陰影、不揃いな粒子の色彩、柔らかで暖かみのある肌触りである。

また、琉球石灰岩は年月を経るにしたがって一般に黒変する。表面が風化、浸食されて、粒子感が一層際立って来る。古い石灰岩の肌合いは厳しささえ感じさせる風格に富んだ優れたものになる。

●その他の石材

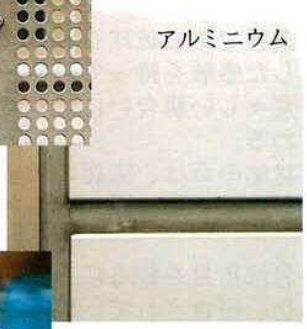
沖縄には琉球石灰岩の他に、古生層石灰岩、ニービノフニ、砂岩、頁岩などの緻密で硬い岩石や、粟石のように一層粒子が粗く多孔質のものもある。硬質のものは加工に手間がかかるために大規模には用いられないが、橋の欄干や装飾彫刻の母材に用いられる。粟石は琉球石灰岩と同様に壁などに用いられ粗い素材感を際立たせる。


平滑なコンクリートの肌

鉄

ブロンズ

ステンレス


アルミニウム

琉球ガラス

●コンクリート

コンクリートはブロックや打ち放しのように、塗装や外装を施さないときに素材感が際立つ。コンクリートは表面の仕上げの粗さやパターンが比較的自由になる。そのため、意識して仕上げを創り出すことができる。

平滑につくられたコンクリートの表面は、冷たく硬い印象だが、打ち欠き、洗い出して表面に肌合いをつくり出すことにより、豊かな表情と素材感が生まれる。

コンクリートは、年月を経るにしたがって次第に黒ずんで汚くなるように思われるが、粗い仕上げを施したり、面を目地やパターンで分割することで、風格あるエイジングを導くことも可能である。

●鋼材

鋼材は構造材として広く使われるが、一般には錆止めの意味もあって塗装が施される。塗装されたものは鋼材の本来の素材感は感じられない。

鉄そのものの素材感は、磨かれた青く光る地金、黒く乾いた黒錆、赤みがかった褐色の赤錆などに感じられる。鉄は自然状態では必ず錆るので、地金の色はそのままでは保てない。鉄は錆の肌合いをうまく活かし、錆をコントロールすることにより、優れた素材感を示す。

●その他の金属

その他の金属では、アルミニウムやステンレススチールなどがよく使われる。アルミは適切に表面処理すれば錆を防ぎ、地肌の素材感を保てる。ステンレスは普通は錆ることがない。これらは、金属的な光沢を活かすときには有効だが、やや鈍い素材感を持っている。

その他に、青緑の錆を活かせる銅、錆びずに鈍く変色する真鍮や青銅などが優れた素材感を持っている。

●木材

木材の特徴は生きた素材の持つ暖かみである。木材は屋外でそのまま使うと腐食が速いため、土木施設では用途は限られるが、人の手の触る所や人をやさしく包むシェルターなどには積極的に使いたい素材である。

また、最近は樹脂を浸透させるなどして腐食しにくい木材もある。ただし、防腐処理したものはエイジングにやや難がある。

●ガラス

採光や見通しを確保するために使う窓の板ガラスは、全く平滑で透明な上にエイジングもほとんど見られない。沖縄でつくられている吹きガラスなど、手作りのガラスは豊かな素材感や色彩を持つ。

●陶磁器その他

陶磁器製品であるタイルや瓦もエイジングの少ない素材である。特に磁気タイルなどはほとんど変化しない。しかし、赤瓦などのように焼成の浅い陶器は、次第に風化して柔らかみを増して行く。

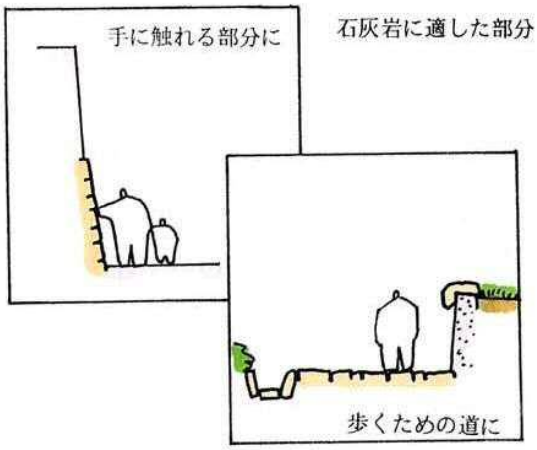
最近はプラスチックやゴムなども随所で使われるが、化学合成品は一般にエイジングの特性があまり良くない。風化すると表面に粉を吹いたように濁ってくる。

（1）地域の素材を活かす

沖縄らしい感覚を景観の中に感じさせるためには、地域の自然と文化に根ざした「地域の素材」を積極的に用いることが重要である。地域独特の素材は、地域の自然が産する原料と、伝統的な技術によって生み出されるために、自然な風合いの優れた素材感を持っている。

（2）琉球石灰岩を活かす

沖縄の優れた天然素材である琉球石灰岩を積極的に使う。琉球石灰岩の特性を活かして、構造材、アクセントとしてデザインに採り入れる。




①琉球石灰岩の素材感を活かす

琉球石灰岩の持ち味であるザラザラとした肌を活かすように、さまざまな仕上げを試みる。特に粗い仕上げを小規模な構造物や身近な施設で使う。

②琉球石灰岩の肌触りを活かす

感触に優れる琉球石灰岩は、特に、人の手に触れる場所に適しており、手すり、腰壁、舗装などに活かす。

肌触りとスケール感に優れた石灰岩の特性を引き立たせるために、ブロックやレンガなどと隣接させることを避け、コンクリート、金属、アスファルト、草地など、連続性の高い素材との対比を活かす。

（3）コンクリートの可能性を引き出す

土木施設に広く使われるコンクリートは、仕上げに工夫して、優れた素材感とエイジングを実現するように配慮する。

①コンクリートの仕上げを工夫する

一般の合板型枠で打設したコンクリートは、一見平滑なようでも細かな凹凸があり、風化と変色が進む原因になる。平滑度の高い仕上げや、ハンマーや洗い出しで表面を荒らしたものの方がエイジングには優れている。眼に触れやすい所や人が触れる所などで、特に仕上げを工夫する。

②水切りに工夫する

コンクリートのエイジングを悪化させる原因に壁面などを流れ落ちる雨水がある。壁面を流れる雨水を少なくするよう、頂部などに設ける水切りや樋に工夫する。

（4）さまざまな素材の組合せ

その他の素材では、構造材として素材感とエイジングに優れたものは余りないが、細かな部分に使える良い素材は多くある。優れた素材感を活かして、いろいろな素材の対比を試みる。以下にその例をあげる。

①石灰岩と鉄の組合せ

ボリューム感、柔らかさ、暖かさなどに優れた琉球石灰岩と、細く硬く冷たい鉄とは、良い対比を創り出す。石灰岩の壁と鉄の手すり、窓枠、階段などの対比的な構成を考える。

②コンクリートとヤチムンの組合せ

重く硬いコンクリートに、繊細で暖かみのある陶器（ヤチムン）をアクセントとして使ってみる。コンクリートの構造物の中でも、手に触れる場所、眼に付きやすい場所、床や路面の舗装、大切な場所を示すアクセントなどとして、ヤチムンを使ってみる。

コンクリートと陶器

# １１．伝統のモチーフ

シーサー

龍（首里城）

鳳凰（紅型）

＜沖縄らしさの特性＞

●景観の中の伝統のかたち

沖縄の景観を特徴づけているものに、沖縄の人々が伝統の中で生み育ててきた様々な「かたち」がある。琉球石灰岩の石垣や赤瓦の家などはその代表である。

●沖縄の家

沖縄の家と言えば、石垣をめぐらせた中に立つ赤瓦の家である。石垣に中の家はまるで、石垣の上に屋根を載せたように見えるほど、軒を低く構えている。軒を低くし、また軒を深くすることで、強い日差しや風雨から生活の場を守っている。知恵が生んだ特徴ある形である。

昔の沖縄の庶民の家は、一般に茅葺であった。今はもう殆ど残されていないが、急な勾配屋根の、キノコのような愛らしい家である。

●シーサー

沖縄の家を守っているのが「シーサー（獅子）」である。

シーサーは沖縄らしさを感じさせるキャラクターの代表である。こわい顔で悪鬼に立ち向かっているが、その表情と姿はユーモラスな親しみを感じさせる。シーサーの姿には、亜熱帯の生命力とおおらかさが宿っている。シーサーは愛すべき沖縄のマスコットである。

●龍

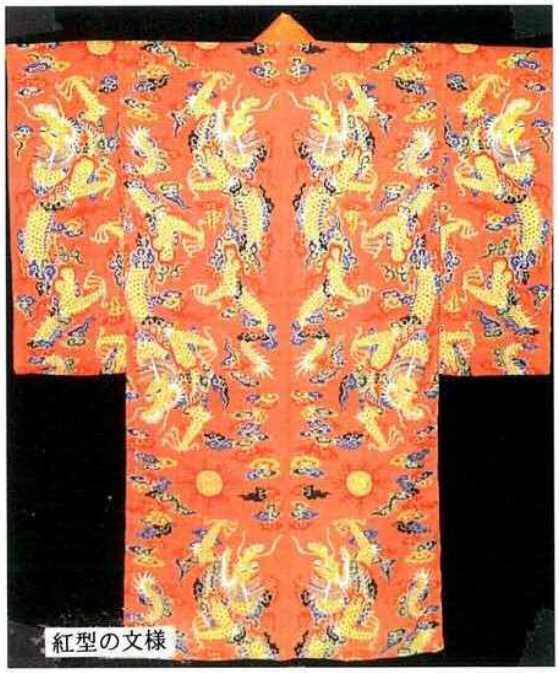
天に昇る龍（ドラゴン）は、東アジア一帯で広く親しまれているシンボルである。それは、大きく、高く、天空をかける姿であり、上昇する意志と崇高さ、まだ見ぬ理想の世界への憧れの象徴である。沖縄では特に高貴な地位の印であった。

●鳳凰

鳳凰（フェニクス）は、紅型によく使われる文様である。鳳凰もまた東アジアを中心に広く親しまれている崇高さのシンボルである。紅型などにあらわれる沖縄の鳳凰は、高貴な優雅さや繊細さを象徴している。

ダチビン

ヤチムンのかたち


紅型の文様

●ヤチムンのかたち、色彩、文様

ヤチムンは沖縄の伝統的な陶器である。そのかたちや技法は中国やアジア各地から影響を受けているが、沖縄で育まれた特有のかたちや色彩、表情がある。

ダチビンの独特のかたちは人体の柔らかい曲線を写し、瓶や壺、碗などには沖縄らしい丸み、ボリューム感、暖かさを感じさせるものが多い。

色彩は褐色や灰色を下地とし、濃褐色、濃緑、白などの柄色がかかる。文様は魚や鳥などの動物、草花や竹などの植物が多く、魚の文様には躍動感がある。

絵付けの技法も、壺屋焼のように、線刻で彫り込んだ上に絵付けをするものは、深みと存在感がある。

●紅型の色彩、文様、パターン

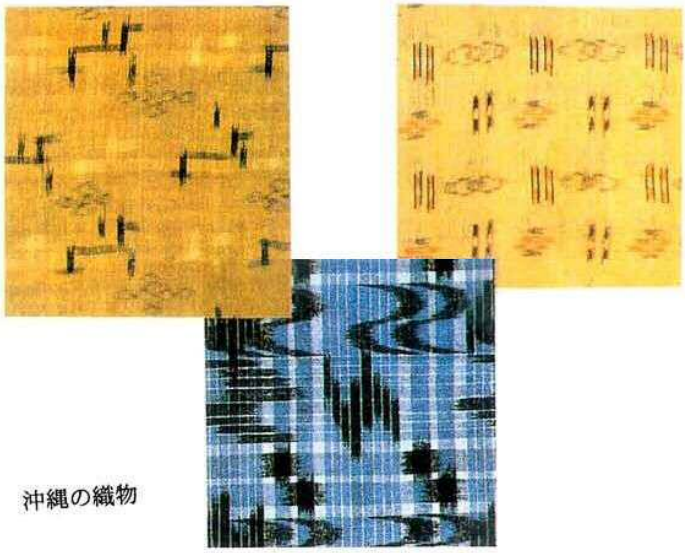
紅型は、原色に近い鮮やかな色（赤や黄）を地色にして、その上に褐色や濃紺などやや落ちついた色で文様が染め上げられている。その文様は一般にひとつひとつのモチーフの独立性が高く、重なり合うことは余りありない。また、地色が常に主役であり、文様が全体を埋め尽くすことも少ない。文様は地色の上に奔放にちりばめられ、自由に躍動するように見える。

文様に用いられるモチーフは、鳳凰、太陽、雲、花、鳥など、動くものや揺れるものが多い。

●織物の風合い

沖縄には芭蕉布や久米島紬、ミンサーなどの伝統的な織物がある。芭蕉や木綿、麻などの繊維は太く、強く、しなやかで、織物はよく風を通し、さらりとした風合いが心地よい。芭蕉布はざっくりとして涼しく、木綿はしっとりとして暖かみがある。こうした織物の特徴は、沖縄の素材感のひとつの典型でもある。

これらの織物のの色彩は、くすんだ黄色や朱色、褐色、藍色、灰色などの落ちついた色がほとんどである。文様は縦糸横糸の幾何学的な組み合わせによる格子模様や、十文字模様が多い。


沖縄の織物

## （1）伝統のキャラクターを活かす

シーサーや龍、鳳凰などの沖縄の伝統的なシンボルやキャラクターは、適切に用いることで沖縄らしさを引き立てる強い表現力を持つ。しかし、これらは文化の中で大切な意味を担っているので、乱用は避ける。伝統のキャラクターの意味や大切さをよく知った上で、要所に配して、景観を引き立てるよう配慮する。

### ①シーサーの使い方

シーサーは一般に、外からやってくる邪悪なものを追い払うことが役割と考えられている。そのため、室内や施設の奥にあっても余り意味がないものである。

シーサーは屋外に、しかも、施設への主要なアプローチに面して置くことが基本である。また、遠くへ睨みを効かせるように、高い位置に置くことも大切である。

入口を睨むシーサー

### ②龍や鳳凰

鳳凰は、シーサーとは逆に、施設の最も主要な部分や重要な部分、格式高く奥まった部分に適している。施設の中でも重要度の低い部分や、外に向かって開かれた場所などは、鳳凰のモチーフにふさわしいとは言えない。

龍は、外に向かって威嚇し権威を示す意味もあれば、同時に大切な空間を荘厳にする働きもある。施設の内外の重要な場所に用いるよう気を付ける。

通りを見通すシーサー

## （2）伝統のセンスを活かす

沖縄の伝統的なデザインでは、このような具象的でしかも想像的なモチーフの他に、もっと身近な現実のものや、幾何学的で抽象的なモチーフも用いる。龍や鳳凰は格式の高い場にしか用いないが、こうしたものはどこにでも使えるものである。

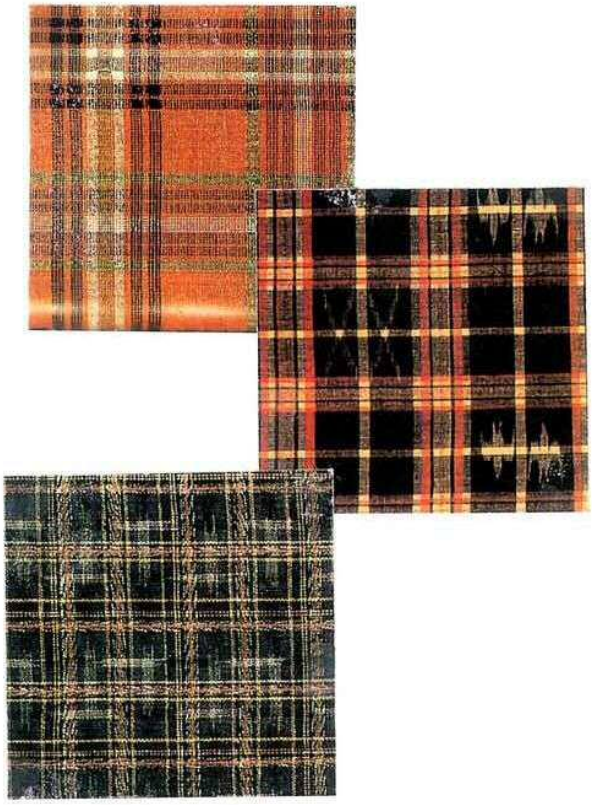
### ①動植物のモチーフを活かす

地域を特徴づける動植物（ヤンバルクイナ、セイシカ等）はデザインのテーマとして最も親しみが持て、気軽に用いられるモチーフである。しかし何処にでも何でも使って良いと言うわけではない。具象的なモチーフとその場所や施設が、密かな関係・関連性を持っている場合にこそ効果的である。

たとえば、海や川に近い場所だからといって「魚」のモチーフを用いることは「あからさま」な手法である。海や川から離れていても、海につながっている道であることを暗示したり、かつて川だった道であることを示唆させる、などの使い方が、密かな使い方であり、優れている。

### ②幾何学的な文様を活かす

幾何学的な文様は、土木施設のあらゆる場面で応用でき、優れたスケール感や心地よい素材感を引き出すことのできるモチーフである。特に沖縄では、地域の優れた幾何学的文様の代表である織物のパターンを道路（歩道）の舗装や、大壁面の分割パターンに応用することにより、豊かな表情と沖縄らしい景観を創り出すことができる。スケール感や素材感などに気をつけながら活用を検討する。



# Ⅲ．土木施設景観計画指針

# Ⅲ.　土木施設景観計画指針

## □　土木施設景観計画指針の構成

土木施設景観計画指針は、土木施設の計画・設計における景観形成の考え方と、景観形成上配慮すべき事項を示したものである。

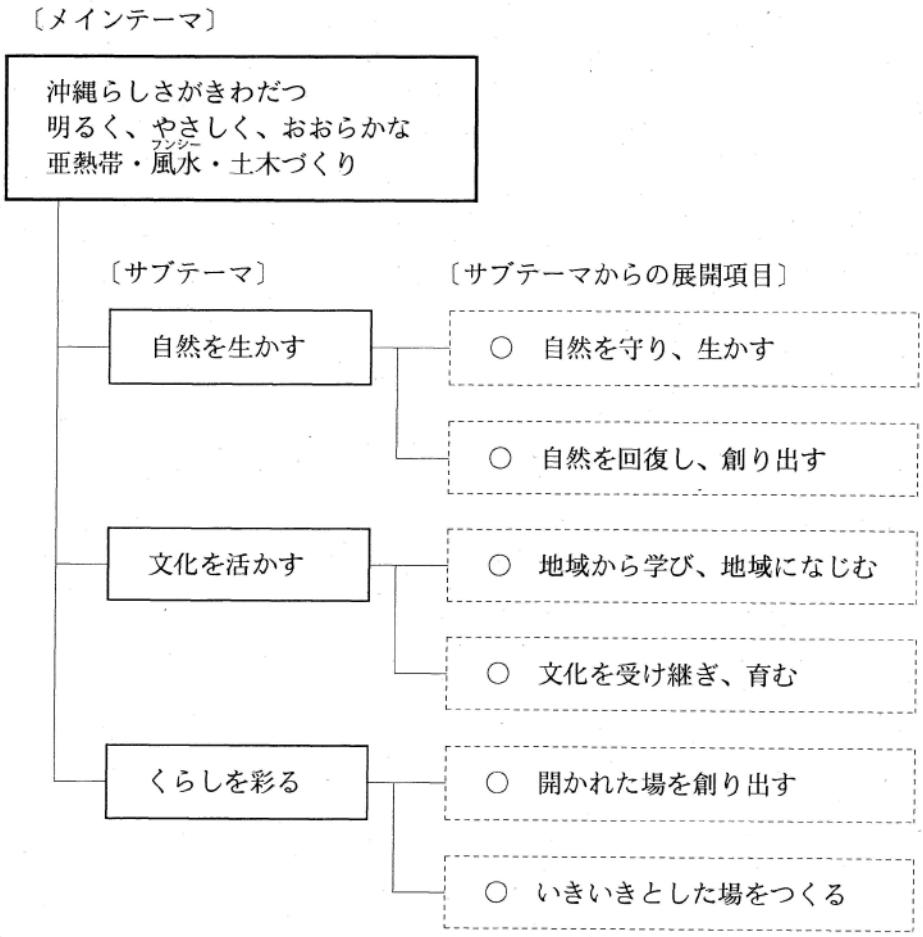
まず、土木施設全般で配慮すべき事項をまとめた上で、以下、土木施設類型別に、その特性に留意しつつ配慮すべき事項を示している。

●共通の配慮事項

ここでは、「自然を生かす」「文化を活かす」「くらしを彩る」の三つのサブテーマ毎に、各施設に共通する景観形成のための配慮事項をまとめてある。

●施設類型別の配慮事項

土木施設を下記のように施設別に分類し、各施設の景観的な特性や固有の構成をふまえて景観形成の視点をまとめている。施設類型は、立地や規模、機能などにより必要に応じて細分している。さらに、それぞれの類型に応じてサブテーマ毎に、キーワードと「配慮すべき事項」を示すとともに、イメージをひろげ、理解を促すための「事例・写真・図版」を掲載している。



1．共通の配慮事項

〈施設類型別の配慮事項〉

2．道　　路　　道路全般

○都市部の道路　（1）都市の幹線道路

（2）商店街・繁華街の道路

（3）歴史地区の道路

（4）生活道路

○地方部の道路　（5）新しい市街地開発地区の道路

（6）自然地・景勝地の道路

（7）農地のなかの道路

（8）集落のなかの道路

○その他の道路　（9）歩行者専用道路（緑道・遊歩道）

（10）自転車道路

（11）橋　梁

（12）トンネル

3．河　　川　　河川全般

（1）都市の河川

（2）地方の河川

4．海　　岸

線・軸の景観を形成する施設

5．港　　湾

6．ダム・貯水池

7．公園・緑地

8．墓地・墓園

9．駐　車　場

10．宅地・開発地

11．交通ターミナル

12．供給処理施設

13．斜面安定保護施設

面の景観を形成する施設

| 施設類型 | 1．共通の配慮事項 | 共　通　1 |
|---|---|---|

| (ｻﾌﾞﾃｰﾏ)<br>自然を生かす | (展開項目)<br>○自然を守り、生かす |
|---|---|

| (ｷｰﾜｰﾄﾞ) | (配慮すべき事項) | (参照) |
|---|---|---|
| 〔自然環境の保全〕 | 1. 地域の成り立ちの上で貴重な自然環境をできるだけ保全する。<br>［保全すべき自然対象］・地形と土壌、<br>・水系と海域、<br>・植生と動物、など。 | P15 ﾃﾞｻﾞｲﾝ2(1)<br>P20 ﾃﾞｻﾞｲﾝ3(1) |
| 〔自然への影響の検討〕 | 2. 路線計画や施設配置計画、施設の構造形式の選定においては、現況の自然に与える影響に配慮しながら検討する。 | |
| 〔自然との調和〕 | 3. 土木施設を地形や水際線に調和させる。 | P27 ﾃﾞｻﾞｲﾝ4(2) |
| 〔生態系への配慮〕 | 4. 周辺の生態系に配慮した土木施設の構造･工法の導入に努める。<br>［構造・工法例］・動物横断路、V字側溝、山際の緑の保護、<br>・産卵地の保護・代替移設、など。 | P23 ﾃﾞｻﾞｲﾝ3(8) |

| (ｻﾌﾞﾃｰﾏ)<br>自然を生かす | (展開項目)<br>○自然を回復し、創り出す |
|---|---|

| (ｷｰﾜｰﾄﾞ) | (配慮すべき事項) | (参照) |
|---|---|---|
| 〔自然の復元・再生〕 | 1. 地域の環境保全の上で重要な自然要素を、多自然工法なども取り入れながら復元・再生を図る。<br>［復元すべき自然要素］・自然林、防潮林・防風林等の緑、微地形・土壌、<br>・砂浜等自然海岸、小動物の生育空間、水辺、など。 | P23 ﾃﾞｻﾞｲﾝ3(7) |
| 〔豊かな緑の創出〕 | 2. 施設敷地内では、できるだけゆとりのある植栽空間を確保する。また、裸地はできるだけ緑で被う。<br>3. 地域の立地・環境特性に整合した樹種を選定するとともに植物が生育し易いような植栽手法を検討する。<br>［環境特性の指標］　・風・潮風、気温・水環境、土壌・土圧、日陰、など。<br>［考えられる植栽手法］・密植・群植・列植・混植、地固め植栽、林縁部保護植栽、段階的植栽、など | P15 ﾃﾞｻﾞｲﾝ2(1)<br>P16 ﾃﾞｻﾞｲﾝ2(4) |
| 〔資源のﾘｻｲｸﾙ〕 | 4. 再生路盤材等、建設副産物の再利用を促進する。<br>5. 雨水の地下浸透を促進する。また、表面雨水による植栽涵養などの雨水の活用を図る。<br>6. 下水処理水の再利用を検討する。 | P42 ﾃﾞｻﾞｲﾝ10<br>P13 ﾃﾞｻﾞｲﾝ1(4) |

| 施設類型 | 1．共通の配慮事項 | 共　通　2 |
|---|---|---|

| (ｻﾌﾞﾃｰﾏ) | (展開項目) |
|---|---|
| 文化を活かす | ○地域から学び、地域になじむ |

| (ｷｰﾜｰﾄﾞ) | (配慮すべき事項) | (参照) |
|---|---|---|
| 〔地域特性の把握〕 | 1. 周辺の都市構造や土地利用、町並み、自然景観等地域の分脈を把握し、地域の景観の基本となる特性や枠組みに配慮する。<br>［地域景観の枠組み］・集落のまとまり、道路網、家屋形式、基調色、など。 | |
| 〔景観資源の活用〕 | 2. 地域の景観資源の積極的な保全・活用を図る。<br>［地域の景観資源］・防潮林、御嶽等の樹林地、屋敷林等伝統的な集落要素、ｼﾝﾎﾞﾙﾂﾘｰ(地域の象徴木)、沿道の広がり景、山並み、ﾗﾝﾄﾞﾏｰｸ（地域の目印）建築、など。 | P15 ﾃﾞｻﾞｲﾝ2(2)<br>P35 ﾃﾞｻﾞｲﾝ7(1)<br>P46 ﾃﾞｻﾞｲﾝ11 |
| 〔周辺景観との調和と対比〕 | 3. 土木施設は、基本的には周辺の景観と調和させる。ただし、必要なところでは、構造物や植栽による積極的な対比景観の形成を検討する。<br>［調和・対比の要素］・ｽｹｰﾙ、ﾌﾟﾛﾎﾟｰｼｮﾝ、形態、色彩、材料、など | P33 ﾃﾞｻﾞｲﾝ6(1)<br>P39 ﾃﾞｻﾞｲﾝ9<br>P42 ﾃﾞｻﾞｲﾝ10 |
| 〔地域との景観の連携〕 | 4. 周辺の町並みとの積極的な景観の一体化が望まれる土木施設においては、当該施設の周辺部も含めて景観を総合的に形成させることで、地域の個性を引き出すよう努める。 | |

| (ｻﾌﾞﾃｰﾏ) | (展開項目) |
|---|---|
| 文化を活かす | ○文化を受け継ぎ、育む |

| (ｷｰﾜｰﾄﾞ) | (配慮すべき事項) | (参照) |
|---|---|---|
| 〔歴史資源の保存・活用〕 | 1. 地域の景観の構成要素となっている歴史的・文化的な土木施設をできるだけ保存し、積極的に活用する。 | P29 ﾃﾞｻﾞｲﾝ5 |
| | 2. 新しい土木施設の形態や素材は、歴史・文化的な土木施設から学ぶとともに、地域の歴史・文化的要素の積極的な土木施設への活用・展開を図る。 | |
| 〔歴史・文化ｲﾒｰｼﾞの表出〕 | 3. 土木施設の全体ｲﾒｰｼﾞや各部・細部・付帯施設においては、土木が個性豊かなものとなるよう、沖縄の歴史・文化的な表現を検討する。 | P46 ﾃﾞｻﾞｲﾝ11 |
| 〔地場素材・産物の活用〕 | 4. 地場の素材や産物を、土木施設の材料として積極的に用いる。 | P42 ﾃﾞｻﾞｲﾝ10 |
| 〔歴史・文化の場づくり〕 | 5. 土木施設がまつりや伝統行事など地域の伝統や慣習に則った行為の場として積極的に活用されるよう配慮する。 | P38 ﾃﾞｻﾞｲﾝ8(2) |

| 施設類型 | 1．共通の配慮事項 | 共　通　3 |
|---|---|---|

| (ｻﾌﾞﾃｰﾏ) | (展開項目) |
|---|---|
| くらしを彩る | ○開かれた場をつくる |

| (ｷｰﾜｰﾄﾞ) | (配慮すべき事項) | (参照) |
|---|---|---|
| 〔ゆとり空間の確保〕 | 1. 良好な景観形成のために、できるだけゆとりある空間・敷地を確保する。 | P38 ﾃﾞｻﾞｲﾝ8(2) |
| 〔周辺とのつながり〕 | 2. 隣接地や周辺部とのつながり・ﾈｯﾄﾜｰｸに配慮する。地域の人々の利用の便にも配慮し、周辺の拠点施設とのﾈｯﾄﾜｰｸを検討する。 | |
| | 3. 隣接地とのつながりは、できるだけ緩やかで連続的・段階的なものとし、ｱｸｾｽの利便性に配慮する。 | P38 ﾃﾞｻﾞｲﾝ8(2) |
| | 4. 可能なところでは、土木施設と隣接敷地との一体的な空間を形成させ、景観的なつながりを持たせる。また、必要な場合には、緑地帯等の緩衝帯を設ける。 | |
| 〔眺望の場所〕 | 5．立地条件に応じて、周辺の景観を見晴らしたり、一つの方向に向けて見通すことができる眺望の場所を施設内に設けるよう配慮する。 | P35 ﾃﾞｻﾞｲﾝ7(1) |

| (ｻﾌﾞﾃｰﾏ) | (展開項目) |
|---|---|
| くらしを彩る | ○いきいきとした場をつくる |

| (ｷｰﾜｰﾄﾞ) | (配慮すべき事項) | (参照) |
|---|---|---|
| 〔適度なｽｹｰﾙ〕 | 1. 大規模な土木施設では、その大構造物の圧迫感と固く単調な印象を和らげるため、ｽｹｰﾙの適正化や形態の分節化を図るとともに積極的な修景を検討する。 | P33 ﾃﾞｻﾞｲﾝ6(1) |
| | 2. 身近で人の眼に触れやすい所は、ﾋｭｰﾏﾝｽｹｰﾙ(人間的な尺度)とｱｲﾚﾍﾞﾙ(視線高)での施設の見え方に配慮し、緑を積極的に用いた潤いのある空間と景観の形成を図る。 | |
| 〔たまり空間の形成〕 | 3. 施設内には、人々の休憩・休息などの場となる小広場・ｱﾙｺｰﾌﾞ（小空間）等のたまり空間を設けるよう配慮する。 | P12 ﾃﾞｻﾞｲﾝ1(3) |
| 〔景観材料〕 | 4. 石灰岩等の自然素材や自然に近い素材、或いは透水性材料・緑化材料など、やすらぎ感や潤い感（ｱﾒﾆﾃｨｰ）の高い素材の使用を検討する。 | P42 ﾃﾞｻﾞｲﾝ10 |
| 〔夜間の演出〕 | 5. 地域のﾗﾝﾄﾞﾏｰｸとなるような土木施設のﾗｲﾄｱｯﾌﾟ（照明による演出）の検討など、必要に応じて夜間の景観の演出を検討する。 | P35 ﾃﾞｻﾞｲﾝ7(1) |
| 〔めりはりのある景観〕 | 6. 景観要素の構成により、景観に強弱(ﾉｰﾄﾞ・ｱｸｾﾝﾄ)や連続性(ｼｰｸｴﾝｽ)を与たえり、通景(ﾋﾞｽﾀ)を強調することで、めりはりと変化のある土木景観の形成を図る。 | |
| 〔多様な活動の場〕 | 7. 土木施設は、祭りやｲﾍﾞﾝﾄ、ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝなど人々の多様な活動拠点となる。人々の活動を促すような空間の整備やﾚｸﾘｴｰｼｮﾅﾙな施設の導入を検討する。 | |

| 施設類型 | 2．道　　路 |
|---|---|

●景観形成の視点

道路は、自動車や徒歩による移動空間として、また都市の公共空間として多くの人の目に触れる重要な施設である。また、沿道景観の広がりや沿道の町並みとともに、特色ある地域景観をつくる大きな要素となる。

交通の安全を確保しつつ道路の性格や沿道の自然・土地利用などに配慮し、それぞれの地域にふさわしい道路景観の形成に努める。

●道路特性による道路の類型

地域にふさわしい道路景観を形成させるためには、まず、道路の機能と立地特性及び周辺地域特性に応じて、道路の類型を特定することが必要である。本指針においては、以下のように11種類の道路類型を設定している。

○都市部の道路
（1）都市の幹線道路
（2）商店街・繁華街の道路
（3）歴史的地区の道路
（4）生活道路
（5）新しい市街地開発地区の道路

○地方部の道路
（6）自然地・景勝地の道路
（7）農地のなかの道路
（8）集落のなかの道路

○その他の道路
（9）歩行者専用道路
（10）自転車道路
（11）橋　梁
（12）トンネル

●道路類型と景観形成のﾃｰﾏ・視点

それぞれの道路類型は、その特性によってﾎﾟｲﾝﾄとなるﾃｰﾏ・視点が異なる。

右の一覧表は上記の11種類の道路類型ごとに、ﾎﾟｲﾝﾄとなる景観形成のﾃｰﾏ・視点をまとめたものである。道路の計画・設計にあたっては、道路全般の指針において、右表を参照しつつ重点的なﾃｰﾏ項目を確認し、さらに、類型別の項目を参照するようになっている。

| | 自然を生かす－自然を守り、生かす | 自然を生かす－自然を回復し、創り出す | 文化を活かす－地域から学び、地域を活かす | 文化を活かす－文化を受け継ぎ、育む、 | くらしを彩る－開かれた場をつくる | くらしを彩る－いきいきとした場をつくる | 〔視　　点〕 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1) 都市の幹線道路 | | ◎ | ○ | ○ | ◎ | ○ | 都市部に緑とｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽを創出をしながら都市の顔をつくる。 |
| (2) 商店街・繁華街の道路 | | | ○ | ○ | ○ | ◎ | 活気とにぎわいのある人の道として、快適な歩行環境をつくる。 |
| (3) 歴史地区の道路 | | | ◎ | ◎ | | ○ | 沖縄の伝統的な空間を継承する場として、歴史、文化的な景観を育む。 |
| (4) 生活道路 | | | ○ | ○ | ○ | ○ | 人々の生活空間の一部として、沖縄らしい人間味のあふれた街路景観を形成させる。 |
| (5) 新しい市街地開発地区の道路 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 新しい沖縄の街の道として、各種の道路に応じて総合的に道路景観を形成させる。 |
| (6) 自然地・景勝地の道路 | ◎ | ○ | | | | | 自然を守り育てながら沿道にひろがる自然景と一体となる道路景観を形成させる。 |
| (7) 農地の中の道路 | ○ | ○ | ○ | | | | のびやかな農地景観を活かしながらおおらかで、沖縄らしい道路景を展開する。 |
| (8) 集落の中の道路 | | ○ | ◎ | ○ | | ○ | 沖縄の伝統的な集落景観になじませながら人間味のある個性的な道路景観を形成させる。 |
| (9) 歩行者専用道路 | | ○ | | | ○ | ○ | 人々が集り、憩う、ｵｰﾌﾟﾝｽﾍﾟｰｽの一つとして快適で潤いのある空間を創出する。 |
| (10)自動車道路 | | | ○ | ○ | | | 地域の拠点や、歴史・文化・自然のｽﾎﾟｯﾄを広域的に活かしﾚｸﾘｴｰｼｮﾝの軸を形成させる。 |
| (11)橋　梁 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 景観のﾉｰﾄﾞ(結節点)及び地域のｼﾝﾎﾞﾙとして個性豊かな橋梁景観を形成させる。 |
| (12)トンネル | ○ | ○ | | | | | |

◎景観形成上、とくに重点が置かれるﾃｰﾏ・視点
○景観形成上、比較的大事なﾃｰﾏ・視点

■　道路類型と重点が置かれるﾃｰﾏ・視点

次頁以降で、まず、全般的な道路の景観形成の計画指針を展開している。さらにそれ以降で、道路類型別に上表での、特に大切な景観形成の ﾃｰﾏ・視点にもとづいて、特記的な配慮項目を整理している。